The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	巻頭言
Author(s)	小西, 真理子
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 3-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86351
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『臨床哲学ニューズレター』vol.4への巻頭言

小西　真理子

『臨床哲学ニューズレター』vol.4は、3つの特集と、2点の「臨床哲学の書きもの」からなります。また、前号と同様、研究室主催のイベントや、水曜5限のアセンブリアワー（学生や教員による関心を共有する時間）についても記録しています。

特集1は栗田隆子さんに講演いただいた第3回臨床哲学フォーラム「書くことと、考えること、行動すること」について、特集2は中川雅道さん、菊竹智之さん、高橋綾さん、ほんまなほさんに発表いただいた第4回 臨床哲学フォーラム「組織に関わる悩み・違和感」についての特集です。ひとつは昨年度末、ひとつは今年度春夏学期に開催されたものですが、両方とも臨床哲学にゆかりのある方々に発表いただくことになりました。ふたつの特集がそのような発表・書きものからなることは私にとってありがたさを感じることです。私が臨床哲学研究室に着任してから 4 年が経過しようとしていますが、私にとって臨床哲学とは大変奥深く、まだまだ知りたいこと、知らないことがたくさんあります。「臨床哲学は難しい」とも思います。人の数だけ臨床哲学があるとも言えるわけですが、先人たちに臨床哲学の姿や、あるいは、そこから枝分かれしたからこそたどり着くような姿を見せていただけることは、わくわくするような経験でもあります。フォーラムの詳細については各特集をぜひお読みください。

特集3は、今年度開催された日本倫理学会のワークショップ「〈応用〉することの倫理――緊縛シンポ、ブルーフィルム、ジェンダー」の特集です。昨年度、臨床哲学ではBDSM（あるいはSM）についての臨床哲学フォーラムを開催し、前号にてその特集も組みました。研究活動などをつうじて、私には SM 当事者の方々に良くしていただいたという経験がありました。そのような関わりをさせてもらってきたという意味でも、これまで SM に限らず聞き取り調査や現場に赴いての研究をしてきたという意味でも、この特集内容の背景にあるものは、私にとって我が事として深刻な問題でした。本特集に寄与してくださった方々、そして、この特集の掲載をお認めくださった研究室の方々に感謝いたします。

また、特集 1 と 3 では、イベントに参加いただいた方々に、感想文をお寄せいただいています。イベントの感想文をいただく取り組みは、第 3 回臨床哲学フォーラムからはじまったものです。フォーラムなどのイベントを1回切りの出来事にしないためにも、そして、『臨床哲学ニューズレター』が「書く場所」を持っている特権層だけによって構成されないためにも、この試みは大変共感できるものでしたので、今後も機会があれば行っていきたいと思っています。

また、前号の特集 1「臨床哲学の今――在学院生・修了生によるエッセイ」の趣旨を引き継ぐべく、ある種の規範的な書き方から明示的に解放された執筆の場を設けるために、今号

から特集外において自由に執筆できる場所を作りました。今号の書きものは、「毒親」という概念・言葉を肯定する論文です。この論文は卒業生の高倉久有さんの卒業論文を基盤とし、加筆修正したものです。ご本人の希望もあり、私の考えや研究蓄積などを一部反映する形で、共著論文として世に出すことになりました。本論文は、現在の毒親をめぐる見解において取りこぼされている視点を見事にあぶり出した大変優れた論文であり、私がお願いする形で本号に寄与していただきました。また、もう一本、ほんまなほさんによる書きものも掲載しております。この書きものは、2019 年 10 月 18 日、19 日に台湾政治大学にて開催された「第 2 回東アジア臨床哲学会議――現象学・人文臨床学・倫理学」でほんまさんが発表された内容がもとになっています。私にとってこのご発表、ほんまさんの体現される臨床哲学の底知れぬ魅力をはじめて自覚的に感じることのできた、大変思い出深いものです。ひとつの舞台のようだったその発表の迫力には圧倒されました。

本号が「臨床哲学」にとって、新たに、そして再度「何か」をもたらし、引き継ぐものになることを、改めて願っております。

（こにし・まりこ）